

課題名：人工主体の創出に伴う倫理的諸問題を分析・討議するプラットフォームの構築に向けた企画調査

代表者：田口 茂（北海道大学大学院文学研究院 教授／人間知・脳・AI研究教育センター長）

参画機関：北海道大学, 神戸大学, 京都大学, 東京大学, 崇城大学, 広島工業大学, 東京都立大学, 量子科学技術研究開発機構, 埼玉医科大学, 立命館大学, 沖縄科学技術大学院大学, 株式会社アラヤ など



課題概要

ロボットや人工知能、脳オルガノイドなどは、人工的に作られたものでありながら、近い将来、技術発展によってある種の「主体」として扱われうるレベルに達する可能性がある。こうした「人工主体」が社会に入り込んでいくとき、そこには深刻な倫理的問題が生じうる。こうした問題を討議するためには、市民・政策決定者・科学者など多様な関係者にとって議論の土台となるような〈原理的な概念的枠組み〉を創出し、様々な形で社会に実装していく作業が必要である。本企画調査では、そのようなプロジェクトの計画・デザインを集中的に行う。まず技術的現状や国内外の関連する議論の調査を行い、それにもとづいて、哲学者・倫理学者・科学者・企業研究者による緊密なチームで徹底的な討議を行い、議論すべき問題や方向性の絞り込み、論点の整理、将来の技術発展のありうるフェイズに対応したプロジェクトの具体的なデザインを行う。

ポイント

高度な自律性をもったロボット、人工知能、人工生命体の研究・開発は、想像を超えるスピードで進展している。もちろん、人間と同等な自律性をもった人工物の創造は、数十年以上先の問題であろう。しかし、「主体」とはそもそも主体同士のインタラクションにおいて創発するものであることを考えるなら、われわれが「主体であるかのように」関わることのできる存在者は、もうすでにある種の「人工主体」と言える。われわれが何らかの人工物を「主体」と見なすとき、そこにはどのような「倫理的」態度が要求されてくるのか。それは人間自身や社会のあり方に、どのような変化をもたらすのか。そして何より、このような新しい技術的状況の出現によって、「主体」の概念そのものが変容してくる可能性があるのではないか。本プロジェクトでは、これらの問題を根本的に討議する。

